



BW-200
(30cm同軸120CX搭載)

後期のユニットの中でも最もオールマイティな音楽ジャンルで楽しめる、CXシリーズの30cm同軸ユニット120CXを搭載。50年代後期に生産され、ミッドセンチュリー家具のようなモダンなデザインが目を引く。高さ70cmくらいの小ぶりの箱で、正面下に低音開口部があり、集積材を使ったちょっと固めの材質で作られている。明るい音場と切れが良く量感のある低音が現代的音楽ソースも無理なくこなす。市場価格35~45万円ペア



**20cmフルレンジ
80FR搭載モデル**

後期のシングルコーンフルレンジユニットのFRシリーズで20cmの80FRを搭載。ワイドレンジではないが、小型の箱からは想像できない豊かな音場を再現。アコースティックなサウンドならこれで十部と言えよう。市場価格20万円前後ペア

※他にも38cmダブルウーファー+ホーンドライバーの大型システム、イームスがデザインした3ウェイのE3システムなども生産されていたが、生産台数も少なく入手はかなり困難



model-617 (P52-HF)
(38cmウーファー103LX+8セルホーンP216ドライバー搭載)

ランシングマニュファクチャリングが37年に発表したフィールド型アイコニックシステムのオールアルニコマグネット仕様。箱は40年代から生産され、初期Tru-Sonicの最もスタンダードなタイプで、大きさ材質はほぼmodel-615と同じ。クロスオーバーは800Hzで、その鮮度の高い澄み切った音はフィールド型にも引けを取らない。電源を別に用意する必要もなく、金額的に入手しやすいのも魅力。市場価格150~180万円ペア

第1回 **Retro-Future**
古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Stephens / Tru-Sonic

(ステフェン/トゥルーソニック)

Tru-SonicはStephens社のブランド名でロバート・ステフェン氏により創立。もともとはJ.B.ランシング氏とともに1930年からスピーカーの開発をしていた人物で、ランシング氏がアルテックに移籍した1941年直後にカリフォルニアで設立。米国人にとって、プロ向けがJBLであるのに対し、コンシューマーには同ブランドのスピーカーが人気だった。本人が死去する60年代後半までシステムから単体ユニットまで全てを製造していた。

model-615
(38cm 206AX)

50年代初期の家具調のデザインが魅力的。バスレフタイプの箱で容積はALTECの銀箱とほぼ同じくらい。材質は米松合板で内部には吸音材は使われていない。箱をウッドベースの脚のように響かせて鳴らす楽器型のタイプ。市場価格80~100万円ペア

本文 / 田中伊佐資

キャプション / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)
撮影 / 田代法生



Tru-Sonic

トゥルーソニック

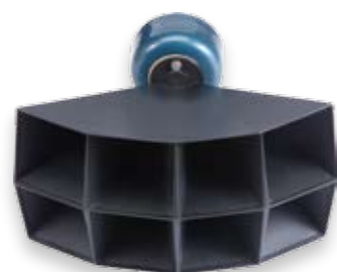
Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



150CX / 120CX

同じ構造の38cmと30cmの同軸ユニットで高解像度のウーファーにトゥイーターが搭載。50年代後半に設計されているため、206AXよりレンジが広い。5kHz以上を受け持つトゥイーターの5KTはJBL 075の原型のようなタイプで、布製ウーファーのエッジに軽く固いコーン紙が採用され、繊細でクリアな中高音と伸びのある低音が特徴。オールマイティなジャンルの音楽に対応可能なタイプで能率も高い。市場価格30万円前後 / 20万円前後ペア



P-216 Driver / 828 Horn

1インチのアルミ振動板を持つP216ドライバー、8セルホーンはJ.B.ランシングとともに設計したアイコニックな形状も材質も良く似ている。ホーンの内部には鳴き止めの用のピッチが注入され、音の暴れを最小減にする事でクセのないクリアな音の再生が可能。市場価格55~60万円ペア



5KT Tweeter

50年代に他社に先駆けて開発されたトゥイーター。JBL075より古く、当時としては驚異的な5kHz~25kHzまで再生可能なモデルとして技術力の高さがうかがわれる。市場価格9~12万円ペア



206AX

50年代初期に発表された38cm同軸ユニットで、大型のアルニコマグネットを使用してウーファーとドライバーを共用で駆動する構造(Tannoyも同じ)とアルミを折り曲げて作られた手の込んだ高域用8セルホーンが特徴。ウーファー部分は103LX、ドライバーはP216と同じ振動板が採用され、クロスオーバーは1200Hz。Altec604と比べても低域に厚みがあり解像力も高く、クリアで抜けの良い音ができるため、JAZZファンに人気。初期タイプの206AXとアッテネーター付きの206AXAがある。市場価格40~50万円ペア



103LX woofer

40年代から作られている38cmウーファーでとても軽く張りのあるコーン紙に大型のアルニコマグネットを搭載しているため、解像力が高く、感度もAltec 515を上回るほど。有名なJBL150-4Cにはこれと同じようなコーン紙が使われているが、103LXのずば抜けて密度の高い中音域とクリアで抜けの良い音質はその強力型ともいえる。市場価格35~40万円ペア

のつけからぶっちゃけますが、私、ビンテージオーディオ、よく存じておりません。所有もしていません。しかしながら、嫌いなものかという点、必ずしもそうでもない。むしろ興味のほうが勝っている。堂々としたシステムをいきなり据え付けるのは無理だけど、瀟洒で粋なものなら、ぜひ欲しい。

そんな半端な具合が続いているのである。私にとって、ビンテージの周囲には、行く手を阻もうとする壁のようなものがある。で、その壁がなにかは、後述するとして、ここでビンテージオーディオの指前番を紹介したいと思う。「アトリエJe-tee (ジェイ・ティー)」代表の岡田圭司さんだ。私がいかにビンテージ音痴とはいは知っている。ところが「アトリエJe-tee」には、それらが幅を利かせていない。「ビンテージは、有名ブランドだけではない。いいものが他にもいっぱいあるんです。ユーザーはもっとチョイスの幅を広げたいと思います」

ズバリそういう機器を世に紹介することが「アトリエJe-tee」のイスマだった。

「岡田さん、さつそくなんですけど、ビンテージっていいな、特に格好がいいなと思ってはいるんですが……」

「やっぱり、いいですよ。誰がどう見てもデザインが素晴らしい。それに加えて、50~60年代の機器は、上質な素材をふんだんに使っています。コーン紙、マグネット、トランス、スピーカーキャビネット、挙げ出すとときりがありません」

「ですが、肝心の音がいかにも音風で実用にならないという気がかりがあるんです」

私は、いきなり、ビンテージの壁その1を口にした。

「この時代の機器は、それぞれ鳴らす環境やスピーカーの目指す音の方向性がかなり違います。」

音は組み合わせ方次第なんです。それは最新のオーディオと変わりませんよ。実際に音を聴いて確かめてみましょう」

「ナット・キング・コール・シックス・ジョージ・シリング・プレイズ」をかけた。アナログではない。CDだ。

ノスタルジックではない現代的な音だった。ワイドレンジなのである。

「すっかり50年代に戻れるでしょう。これは一種のタイムマシンですよ」

確かにその音に感服した。が、パンザイは片手だ。私は、続けざまに次の言葉を発表するか迷った。「パリの現代録音盤をかけてください。それは、ビンテージショップではもしかして禁句ではないか。」

ところがどうだ、岡田さんは、私の胸中を察したかのように、次のCDにバット・メセニーの「ワン・クワイエット・ナイト」を選んだ。ついさ、6年前の録音である。

「けっこういい音でいいですよ」

「いやいや、これは……」

絶句だった。音離れが強烈にいい。振動板の軽さ、それによるすばしっこさがもろに出てくる。レンジも決してナロウじゃない。

「このスピーカーはなんというんですか」

「トゥルーソニックの615というんです」

これで決まった。第1回のテーマはそれだ。しかしその名前は聞いたことがない。

日本ではあまり認知されていないため、信じがたい実力のわりには価格は安いという。ビンテージには、オールマイティに使える、コストパフォーマンスがよい製品がいっぱいある。岡田さんはそう訴える。

私のビンテージに対するイメージはかなり軟化した。しかしながら、横たわる壁が完全払拭したとはいえない。次号では「壁その2」について露骨に迫ってみよう。

洗練されたデザインと質感を持ち 音質は現代的なワイドレンジ再生

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイ、JBL、マッキントッシュなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べるほかの多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。東京、目黒にあるビンテージショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。

第10回 トウルーソニックの大型スピーカー

STEPHENS Tru-Sonic

analog vol.22 でも紹介したSTEPHENS Tru-SonicはJ.B. ランシング氏と共に1930年代からスピーカーの開発をしていた ロバート・ステフェンス氏によって1941年頃にカリフォルニアに設立。当時から製品のクオリティが高く、プロ用音響機器や仕上げの美しい高級ハイファイスピーカーをメインに生産し、オーディオファン憧れのブランドだった。残念な事に日本でオーディオブームが始まる70年代には先に50年代頃にピークを迎えていた欧米のオーディオブームは下火になりSTEPHENS社のほとんどの製品も日本には紹介されていない。

本文 / 田中伊佐資
キャプション / 岡田圭司 (アトリエJe-tee代表)
撮影 / 小林幹彦 (彩虹舎)

P-63HF System

1940年代後期にシアター用やプロユースを目的に開発された大型システム。その壮大なスケール音と大型ながらクリアで抜けの良いサウンドは2発の103LX38cmウーファーとH625 / P30ドライバーのコンビネーションから繰り出される。生産台数が少ないためアメリカでも入手が困難でステレオでペアで試聴できる事がめったにない伝説の名機である。



P-63HF Systemのキャビネットは響きの良い米松合板で構成され、その構造は同社が好んで採用しているスリットタイプの低音放射方式になっており、低音は正面ホーンの両サイドのスリットから放出される。そしてH625 10セルホーンを装着したP30ドライバーが内部補強板に載せられている。当時は600Hzの専用ネットワークを使った2wayシステムとして活躍していたが、このシステムに同社の5Kトウィーターを追加して3wayシステムとする事でより最新の録音ソースにも対応が可能になる。外観は初期タイプはホーンもすべて同色のハンマートーン塗装。後期タイプはホーンが黒塗装で箱はハンマートーンに仕上げられていた。サイズは高さ125cm、幅90cm、奥60cm、重量105kg。市場価格は450～500万円ペア



Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



STEPHENS Tru-Sonicのロゴマーク

P30 Driver

同社の最高品位のドライバーで3.5インチ(約9cm)のアルミ製ダイアフラムを強力な大型アルニコマグネット駆動させている。P30はJBLの375と同クラスのドライバーとなるが、ダイアフラムがより薄く軽量になっているためより高域再生能力に優れ、また効率も高く同社の103LX38cmウーファー2発と同等のエネルギーを備えている。市場価格は65万円前後ペア



X600 X-over

P30ドライバー専用の600Hzクロスネットワークで大型のコイルとオイルコンデンサーで構成されている。ケースの材質はベークライトで中は振動止めにぎっしりとピッチで埋められている。市場価格は9～12万円ペア



103LX Woofer

1940年代後期から作られている当社最高品位の38cmウーファーで、非常に軽く張りのあるコーン紙にかなり大型のアルニコマグネット搭載しているため、とても音の解像力が高く、感度もAltec 515を上回るほど。有名なJBL150-4Cはこれと同じようなコーン紙が使われており、ずば抜けた密度の高い中音域とクリアでぬけの良い音質はその強力型ともいえる。市場価格は50万円前後ペア



P-52HF System

1940年代初め頃から生産されている38cmユニット専用のエンクロージャー。当時は38cm同軸ユニット206AXが搭載されてプロ用スタジオモニターとしても活躍していた。Altecの銀箱612と外観、材質が似ていて容積もほぼ同じだが、縦長のフロアタイプとなっていて、より低音が出る構造になっているため、セッティングがしやすくなっている。また、103LXウーファーと8セルホーンドライバーを搭載させると、J.B.ランシングが開発した事で知られるアイコンックスピーカーと同等なシステムとなる。



いつもの目黒にあるアトリエJe-teeを飛び出すところから話が始まった。向かった先は同店の倉庫だ。東京から高速で西へ小一時間ほど走った場所にある。多くの製品は輸入されてから、当座そこで待機して出番を待つ。「ヴィンテージ・オーディオの倉庫」というフレーズはどこかわくわくさせるものがあるが、薄暗い蛍光灯がジワーとなるホコリっぽいビルの一室をぼくは想像していた。着いてみると、そこは広さにして50畳、製品は壁際に積まれていて、中央に試聴スペースが空いている。フロアスタンドやお洒落なイスまでもある。店に運びきれない大型スピーカーをお客さんと聴くこともあるそうだ。居心地がいいわけだ。ということ、移動させるのが一苦勞の巨大スピーカー、トウルーソニックP63HFシステムが今回の主役になる。誌面では切り抜き写真になっていると思うが、もののしきは伝わりにくいだろう。38cmウーファーが水平に2発ついている。たいていその場合、デザインは横長のエンクロージャーになるものだが、これは豪勢にも縦に長いのだ。日本初登場となる稀少品らしい。モノラル時代の1点ものだから、ペアでそろえるのに6年もかかったとオーナーの岡田さんは言う。うれしいのは、お客さんにまだ披露していないので、これが試聴第1号ということだ。

いう意図があったのか、岡田さんはデューク・エリントンとカウント・ベイシーのビッグ・バンドを連続してかけた。目黒の店とは違い、人耳をはばからない音量だ。これには、ややよとなった。グレート・アメリカン・パワーが噴出する。なおアンプは、75Wのパワーを誇るウエスタンKS-16610だからゴージャスの極みなのである。そして物量に頼ってひたすら押しの手だけではない。高域ドライバーの振動板が軽く上質で、現代録音のアコースティック楽器や女性ヴォーカルもいける。これが半世紀以上前の2ウェイ・スピーカーとはね……うーむ、である。そしてサラサラしていない芯の強さがある。測定しても値に出てこない強さだ。ここで一歩押し進めて、同じトウルーソニックのトウィーターを追加して3ウェイにしてみた。ノラ・ジョーンズやマドンナなどの新しい録音には、全体が柔らかくなってしっとりする。フォープレイのフュージョンは切れ味が命の音質なので、これはトウィーターがあった方がいい。最後にリンの高音質録音盤「シベリウス・組曲「ペレアスとメリザンド」」がかかった。豊かな弦の響きとエンクロージャーの鳴りがうまくマッチして、目をつぶっているとずっぷりホール・コンサートの気分。だが、ふと見回すとそこは倉庫。オーディオのイリュージョンを芯から体験した。

日本初登場の巨大スピーカーを堪能
ずっぷりホール・コンサートの気分



キャビネットとユニットのフレームはどちらもアルミ製で25mmほど前に突き出ている



E-2の正面写真

スピーカーキャビネットの正面の枠とユニットのフレーム、そして脚の部分がアルミ製となっている、真正面からは木目の部分が全く見えないデザイン。少し斜めから眺めると天板や側面に美しい木目が見える。正面は円と四角のみのデザインだが、黄金比ともいえるバランスのいい比率がとても目を惹く。当時の音楽鑑賞はまだモノラル時代だったので、左側に円、右側に四角の1タイプしか製造されていなかった



120-CX

1950年代後期に開発された30cmコアキシャル・ユニット。赤い布製のエッジは半永久的なタイプでとても目を惹く。5,000Hz以上を受け持つ5KTツイーターはJBL-075の原型のようなタイプで、抜けの良い特性の高域音がフルレンジ的な鳴りのウーファーに良くマッチ。クリアな音質で、どんなジャンルの音楽にもオールマイティに対応できる

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回は米国Stephens社が1950年代に手掛けたトゥルーソニック／イームズラインのスピーカーを紹介する。

本文 / 田中伊佐實

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)

撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

第41回 Stephens / Tru-sonic

Stephens社はアメリカで1940年代からスピーカーメーカーとしてよく知られていた。そして、同国でオーディオブームが最盛期を迎える1950年代の中頃、当時既にアメリカでインテリアデザイナーとして名前が知られていたチャールズ・イームズにスピーカーのキャビネットデザインを依頼。1957年頃にイームズが世界で初めてデザインしたスピーカーシステムとしてTru-sonic / Eamesラインの4タイプのスピーカーを発表した。当時としてはめずらしく外装にアルミと木材を匠にマッチングさせたモダンなスタイルとなっていて、現在でも古さを感じさせない完成度の高いデザイン。そのなかの数点は著名な博物館に所蔵されている。



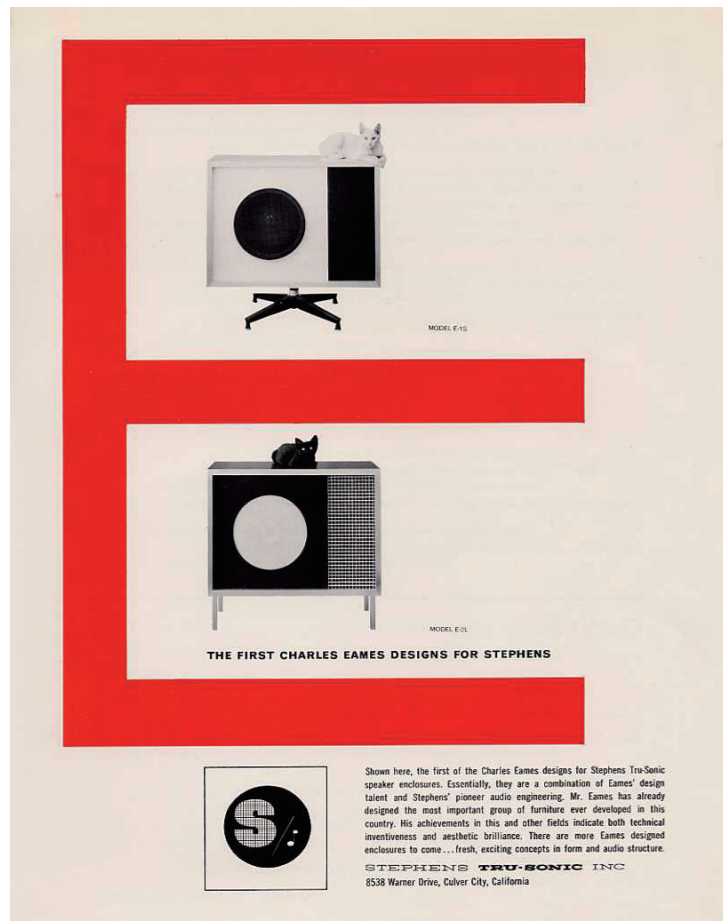
E-2

E-1とE-2のキャビネットサイズは同じだが、ユニット構成が異なる。今回紹介するE-2は30cm 2ウェイのコアキシャル・ユニットを搭載したタイプ。初期タイプは122AX、後期タイプは120CXを採用している。キャビネットの構造はショートバックロードホーンになっており、材質は米マツ合板を使用。脚部の形状の違いで2種類がありE-2Sはハーマンミラー製と思われるX脚が装着されており、E-2Lはアルミ製の4本脚となっている

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Tru-sonic / Model E-2



Shown here, the first of the Charles Eames designs for Stephens Tru-sonic speaker enclosures. Essentially, they are a combination of Eames' design talent and Stephens' pioneer audio engineering. Mr. Eames has already designed the most important group of furniture ever developed in this country. His achievements in this and other fields indicate both technical inventiveness and aesthetic brilliance. There are more Eames designed enclosures to come... fresh, exciting concepts in form and audio structure.

STEPHENS TRU-SONIC INC
8538 Warner Drive, Culver City, California



今回の試聴に使ったアトリエJe-teeオリジナルシステム

「je-tee ミッドセンチュリー style speaker system」

キャビネットデザインはチャールズ・イームズやジョージ・ネルソンのスタイルをアレンジして、構造や素材もオリジナルを元に設計。小型のブックシェルフ型とフロア型でそれぞれカラーリングも2種類ある。搭載されているユニットも当時のビンテージスピーカーにこだわり、小型のブックシェルフ型は60年代中頃に生産されたUTAH社の30cmコアキシャルユニット。フロア型はサイズも構造もE-2と同じでTru-sonic 120CXが搭載され、専用のアルミのX脚スタンドがオプションで装備可能となっている。サイズはブックシェルフ型が600W×40H×300Dmm、フロア型は760W×55H×340Dmmとなっている

1957年頃の Tru-sonic オリジナルのカタログ

大きく赤で「E」の文字をあしらったデザインのパージ下の方に誇らしげにTHE FIRST CHARLES EAMES DESIGN FOR STEPHENSと表記がある。上がX脚タイプのE-2Sで下が4本足タイプのE-2Lとなる。正面のカラーリングにはブルーとブラックのほか、木目仕上げも数種類あった

「今日はトゥルーソニックですよ」とアトリエJe-teeへ行く道すがら編集者から告げられて、連載の初期に同軸ユニットを取材したことを思い出した。「あれはもう一度聴いてみたかった」などとあれこれ話をしているうちに店へ到着。試験室に入ったとたん「というかイームズじゃないですか」と僕はうれしくなつて岡田さんに声をかけた。

かつて目の前にあるタイプよりワンサイズ大きいものが店に置いてあった。その格好い姿は今でも記憶に残っている。そのとき岡田さんは何も知らなかった僕に「アメリカのミッドセンチュリー期を代表する家具のブランドなんです」と教えてくれて、なるほどと納得した。

デザイナーのチャールズ&レイ・イームズ夫妻が手掛けた作品は多岐に及ぶらしい。インタストリアル・デザイン界に与えた影響は多大だ。作品群のなかにスピーカーがあったのは実に喜ばしい。

今回登場するのはE-2というモデルだ。E-1からE-4までサイズや仕様異なるバリエーションがあるそうで、以前、僕が見たのはE-3だった。

「四角と丸の比率が抜群にいいデザインだよ」と言われ、確かにあと1cmでもどこかが長かったり短かったりすると、このデザインは崩壊するだろう。

そしてイームズがさすがなのは、あくまでもスタイル重視で音質はお茶を濁す

この洗練された音と美しさ
共有されなければ罪である

みたいな感覚で作っていなかったことだ。オーディオメーカーに負けない音を目指していた。

やっとな冒頭の話につながるが、使用しているユニットがトゥルーソニックの30cm同軸なのである。

まずはビル・エヴァンスの「酒とバラの日々」、コルトレインのバラード「セイ・イット」がかかった。

明るくてかなりスケがいい。気負いがなく気持ちいい音。奥深いヴィンテージ・サウンドではあるけれど、見た目に引く張られるのかもしれないがレトロ感には希薄で見事に洗練されている。「名は体を表す」としてもそれほど強引ではないだろう。イームズ家具に通じるモダンなセンスがにじみ出ている。

新しい録音で定番のダイアナ・クラールの「ルック・オブ・ラヴ」を聴く。声の定位、フォーカスの絞りがいい。さすがは同軸ユニットだ。バックの演奏もよくほぐれていて、まだるっこいところがない。

このスピーカーはどう考えてもオーディオルームでパーソナルに使うのではなく、来客をもてなすための部屋に置くべきだろう。この美しさを一人でも多くの人と共有しなければ罪だ。

当時のオリジナル品は減多に市場へ出てこないそうだ。Je-teeはこの春レプリカの製造・販売を開始するらしい。



H-814/P-216 ホーンドライバー、T-212トウイター、P-216用のX-800ネットワーク。H-814 ホーンはアルミの板を折り曲げて作られており、ホーン内部には鳴き止め用のピッチが充填されている。



Model-629にサラネットを外して正面からみたところ。キャビネットは全て米松材で構成され、フロントのサラネットは、キャビネットの下の方向に引き出す構造になっている。ウーファーユニットは同じタイプが2機搭載されており、構造は縦に返し型のバックロードホーンタイプとなっている。初期型は2ウェイ・システムでP-52LX / 38cm ユニットと、8セルのホーンH-824に、P-15ドライバーが搭載されていた。後にユニットが103-LXとP-208 ホーンドライバーに変更され、最終型は38cm 150-FRユニット、4セルホーンH-814にP-216ドライバー、さらにT-212トウイターが搭載された3ウェイ・システムとなる。サイズ 113H×91W×46Dcm。



低音バックロードホーン構造の開口部

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回は前回に続き米国Stephens社のスピーカーを紹介。JBLのエベレストの前身のようなデザインのダブルウーファー、Model-629を紹介しよう。

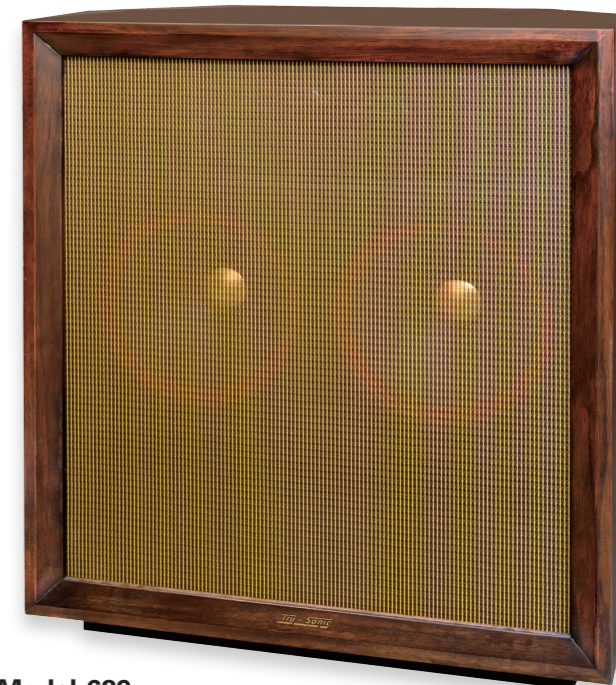
本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表)

撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)

第42回 Stephens/Tru-sonic

前号でも紹介したStephens社は、会社設立当時は映画館用の大型スピーカーシステムも生産していた。1950年代に入ってアメリカで家庭用オーディオがブームとなり、同社はコンシューマーのハイエンドユーザーのためのスピーカーを主力として開発するようになる。当時は38cmウーファーをダブルで搭載する家庭用の大型システムも数種類あり、現代のスピーカーシステムの原型になったようなスピーカーもあった。



Model-629

1940年代に開発されて1960年代の始め頃まで、搭載するユニット構成を変更しながら比較的長い間生産されていた家庭用の高級モデル。ハイエンドユーザー向けの少量生産だったため、他社の同じタイプのものよりも値段も高く、生産台数が少ない機種としてアメリカのマニアの間ではとてもレアなシステムとされている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



T-212. 黒いプラスチック性の丸いホーンにアルミ製のダイアフラムを搭載したトウイタードライバーの音色を妨げないでマッチングが揃う良く計算されたユニットである。



150-FR. アルミのセンターキャップに赤く塗られた布製のハードエッジタイプで、JBLのD-130と150-4Cを合体させたような特性のユニットである。コーン紙も薄く張りがあるため、ハイスピードで抜けの良い音になっている。またエッジを布製のハードエッジにしたことで、耐久性も上がり、今に至っても劣化が少なくオリジナルの音質特性を保っている個体が多い。



P-216. 814ホーン、800 Hz / 5000 Hz ネットワーク。1インチ程度のアルミ製ダイアフラムを搭載していて、当時のドライバーとしては珍しい小さな丸い穴が複数空いているマルチスロータイプを採用。これはこの当時に世界的にもTru-sonicが最初で、その後Tannoyのドライバーユニットにも採用されている。

Tru-sonic / Model-629

飛びきり上質なミッドレンジ すべての音楽をつましく聴かせる

「今日はトゥルソニックですよ」とアトリエJe-teeへ行く道すがら編集者から告げられて「あれ、デジヤブか。この前もそんな前振りだったような」と思ったら、前回のようないい音供給して話ではなく、同社製のスピーカーシステムそのものがテーマだった。型番はMODEL629という。これはネットで検索してもなかなか出てこない。岡田さんによれば「取り扱うのはこの10年間で2セット目」らしい。

15インチのダブルウーファー。試聴室が広いせいもあるが、そうした堂々たる仕様のわりにはコンパクトに見える。この時代のヴィンテージ品は「俺はスピーカーだ」と訴えるよりもまず、家具として部屋と調和することを優先してデザインされているように思う。

フロントのネットを外すとバックロードホーンの複雑な設計が確認できた。メカ好きとしては、そういう手の込んだ技術が露出させたいところだが、アメリカ上流階級の豪華な居間や応接間に置く前提だから、そんな姿はやはり無粋ということになるのだろう。

ともあれ音を聴きましよう」と「ヘレン・メリル・ウィズ・クリフォード・ブラウン」のご存知「ユード・ビー・ソー・ナイス・トゥ・カム・ホーム・トゥ」からスタート。全体の質感がすごく滑らか。荒っぽさもなければ、帯域的に出っ張りやへこみ

も感じられない。CMにも使われ、飲食店などのBGMでもちよくちよく耳にするお馴染みの曲だが、改めて深く聴き入った。耳のタコがボロリと落ちた。大型ウーファー2発の場合、低音が膨らんだり滲んだりしがちだ。だがこれはパリッとはじけている。音圧も十分だ。むやみに重低音を追求せず、ウッドベースのおいしい帯域をおいしく聴かせる。トランペットはしっかりとこちらに飛んできた。気持ちよく突っ込んでくるけど、けたたましくない。ポンとセットしてこんな簡単ないい音が鳴っちゃっていいのだろうか。

エレクトリック・サウンドの代表としてステイリー・ダンの「ハイ・ナインティーン」。ドラムマシンとドラマーが混在するビートが気持ちよく、途中で音量を上げてもらった。

続くパッパの無伴奏チェロは荘厳に鳴り響く。ソフトとハードがジャストミート。やはり生楽器のほうが相性はいいのかなと思っていた矢先、最後に荒井由実の「ルージュの伝言」がかり、こちらもびったりハマっている。

どうやらアコースティックかエレクトリックかといった視点はあまりにも短絡的すぎたようだ。深みがあって身のこなしがいいミッドレンジが飛びきり上質で、時代や国に関係なくすべての音楽をつましく聴かせているのだった。



T-212/X-5000

黒いプラスチック性の丸いホーンにアルミ製のダイアフラムを搭載したトゥイーター。X-5000 ネットワークで5,000Hzから15,000Hz くらいまでの帯域までを受け持ち駆動する。

Model-620

前ページの Model-622 システムのスクエア箱タイプで、1940年代後期から生産されたモデル、こちらも厚さ12mmの米松合板で作られており、内部構造も Model-622 同様のスリット型のショートロードが採用されている。後ろ面パッフルが1枚板なのでこの部分が共鳴して低音再生がより豊かな感じを受ける。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号ではアメリカ、カリフォルニアに設立されたスピーカーブランド、トゥルーソニックの1940年代に生産された 30cm ユニット搭載モデルをオリジナルボックスとともに紹介しよう。

本文 / 田中伊佐資

製品解説 / 岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影 / 小林幹彦(彩虹舎)



Model-622

1940年代に生産された 30cm ユニット搭載モデル。コーナータイプで厚さ12mmの薄い米松合板で造られており、内部構造は Tru-sonic がよく採用するスリット型のショートロードになっている。低音は量感もありながら切れの良い再生音を可能にしている。こちらは初期モデルで正面にアールデコ調の真鍮の飾りが美しい。

第45回 **Stephens/Tru-sonic**

Stephens 社は1941年にロバート・ステフェンスによりアメリカ、カリフォルニアで会社設立され、Tru-sonic のブランド名でスピーカーをメインに販売していた。設立前はJ.B.ランシングと共に映画館用の大型スピーカーシステムを開発しており、設立当時はプロ用スピーカーメーカーとして良く知られていた。50年代に入ってアメリカで家庭用オーディオが大ブームとなり、stephens 社はコンシューマーのハイエンドユーザーのためのスピーカーを主力として開発するようになる。この頃からフレーム塗装がカリフォルニアの青い空のようなブルーに変更され、当社特有の明るく澄み切ったサウンドと良くマッチしている。

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ



112-FR

1940年代後期に開発された30cmフルレンジユニットで、コーン紙はP-22FRと同じタイプの薄いカーブドコーンタイプが使われている。先代のP-22FRよりマグネットが少し小さくなっていて、アルミのセンターキャップが採用され、高域再生を助けている。



P22-FR

1940年代に生産された30cmフルレンジタイプユニットで、38cmユニットと同じサイズのマグネットを搭載。ユニットセンターにはアルミ製の円錐形デフェューザーが装備されている。スタジオなどで小型モニター用スピーカーとしても当時使われていた、とても生産数が少ないモデル。このユニットに採用されているコーン紙はとても薄くて張りがあり、当時から現在までアメリカで製造された数ある 30cm ユニットの中でもこのコーン紙ほど軽量で響きの良い物はない。



122-AX

1950年代初期にハイエンドユーザー向けに開発された高性能 2ウェイ・コアキシャルユニットで、イムズがデザインを手がけた最初機の E-1、E-2、E-4 にも採用されている。112-FR フルレンジの中央に 212 トゥイーターをマウントさせた2ウェイ・コアキシャルユニットで、ネットワークには2μのコンデンサー入っている。フルレンジの30cmユニットと5,000Hzで低域をローカットしたT-212 トゥイーターで駆動されていて、とても薄くて張りのあるカーブドタイプのコーン紙の特性の良さが非常に良く生かされている。

Stephens Tru-sonic / Model-622

奇跡のペアが導く底知れぬ魔力を
純正エンクロージャーで堪能する

僕が愛用するモノラル用スピーカーはジェンセンの15インチユニットを同社C A-112エンクロージャーに入れたもの。5年前に岡田さんが見繕ってくれた。型番からしてこのエンクロージャーは12インチで使うのが本来だろうから、いずれはこのサイズの同軸で鳴らしてみたいなあなど思っている。15を知ったからこそ、トゥイーターとつながりがいい12の良さがわかった。

そこでだ。いつものように取寄って詳しくテーマを訊かないまま店に入ると、まさにその12インチ同軸ユニットがでんと置いてあるではないか。

岡田さんはそれを見ながら「トゥルーソニックの122-AXです。これがペアで揃ったので純正エンクロージャー620に入れました。きょうはそれを聴きます」と言いつつ、そのユニットを手に取り、コーン紙を指で軽く撫でた。

パリッと擦れる音がした。張りがあって乾燥しきっている様子がそれだけでわかる。間違いなく感度がいいはずだ。

「50年代のユニットでは最軽量ではないですか。今ではもう作れる人がいない職人技ですね」と付け加えた。

まずはデイヴ・ブルーベック・カルテットの「タイム・アウト」から「ザ・ストレンジ・メドウ・ラーク」がかかる。このアルバムが出てくると自動的に「テイク・ファイヴ」に遭遇するパターンが

常だが、この選曲はスピーカーの美点を見事に引き出した。

冒頭のピアノソロ。これもしつとりしていても良いのだが、2分を超えてから真打ち登場というようなタイミングで現れるアルトサクソ。これにはドキツとしてのけぞった。軽やかで艶があって開放的で、そのスウィートな響きを持って行かれた。決してハイファイではないけれど、ヴィンテージオーディオの底知れぬ魔法がそこにあった。何なんだろう、部屋の空気に溶け込むようなこの音は。

続くビル・エヴァンスのヴァンガードのライヴにしてもヴィリー・ボスコフスキーのモーツァルトにしても、なにかとカサつきがちに心に潤いを持たせてくれるように鳴り響く。

リチャード・タニクリフのバッハ無伴奏ソロも極上だった。超軽量振動板を持つユニットと良質なエンクロージャーがもたらす心地良いハーモニーがチェロそのものを出現させる。

ということで裸で置いてあったP22や112を自宅のエンクロージャーに入れたらどんなだろうかなどと思っていたら、岡田さんが何気なくつぶやいた。

「これもペアにしたくて、コンディションのいい相方を探しているんです。きれいなエンクロージャーに入れば、また何十年も大事にしてみらえるんです」

僕の夢想はたちどころに消えた。



1950年代初頃のカタログ

低音の開口部は湾曲したバツフルの2重構造になっていて、ユニットの両サイドから低音が放出される



キャビネットは比較的奥行きが薄く、後ろの側角は少し斜めになった構造になっていて部屋のコーナーにも設置しやすいデザインになっている



フロントのサランネットは棒ごと下に引き出すことができ、バツフル板を外してユニットの装着などができる。キャビネットは2重構造になっており、内部の後ろ面には大きくカーブした低音の反射板が取り付けられている。その手前中央に38cmユニットを装備させる半円筒状の構造になった部分があり、正面にユニットを装着した真後ろに低音を放出するスリットが開いている。比較的幅の広い大きさのキャビネット、正面ユニットの両側から低音が放出されるため、モノラル1本で音楽を再生しても、かなり広がりのある音場感を得ることができる

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

Tru-sonic 206AXA



センターのツイーター用の8セルホーン。とても手が込んでいて40年代のシアター用のマルチセクトラルホーンの構造と同じように一区画ごとにアルミを折り曲げて作られており、ホーンの外側はしっかり手の込んだデッドニング処理がされている



AXAタイプからツイーター専用の3段可変アッテネーターが付属している

当社の最高グレードのコアキシャルユニットで、このAXAタイプから3段切り替えの高域アッテネーターがネットワークに装備される。明るくハイスピードでリアルな再生音は他社と比べても群を抜いていて、このユニットでしか聴けない、音階のはっきりしたベースラインやバスドラムのスパンと抜ける音、そして澄み透るようなヴォーカル再生音が特徴。このユニットの最大の肝となる38cmウーファーコーン紙は1930年代に同社が開発したフィールド型ユニットE-52Lにも使われていて、当時から定評が高く、その後の JBL Hartsfield、Paragon 等に搭載される150-4Cにも装備されることになる。



ウーファーフレームは綺麗なコバルトブルーに塗装されていて、赤い部分はすべてむき出しのアルニコマグネットとなっており、その強力さが伺える。ネットワークはフレームにネジで固定されている、38cm ユニットでこれだけ大きなアルニコマグネットを搭載しているのは他にない

Retro-Future

古くて新しい もうひとつのビンテージオーディオ

ビンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのビンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号は本連載の原点ともいえるトゥルーソニック。第1回で紹介した206AXにオリジナルのエンクロージャーが見つかったという。これは紹介しないわけにはいかない。

本文/ 田中伊佐資

製品解説/ 岡田圭司(アトリエJe-tee代表) 撮影/ 小坂直樹(彩虹舎)

第48回 Stephens Tru-sonic

同社は30cm、38cmのフルレンジスピーカーユニットをメインに開発していて、これらを搭載するキャビネットにも、プロ用から家庭用の家具調タイプまで様々なバリエーションがあった。家庭用は当時のハイエンドユーザーをターゲットにしていたらしく、当時の豪華な部屋のインテリアにもマッチするようにキャビネットの構造や仕上げも美しく豪華だった。そのためか生産にコストがかかり、他社と比べて値段も高かったためか生産台数もかなり少ない。



Tru-sonic Model-627

モノラル再生全盛の1950年代初めに開発された同社の38cmコアキシャルユニット206AXを搭載したシステム。内部はバックロード構造になっており、美しい木目の家具調デザインにコアキシャルユニットを搭載した最高級システムだった。このキャビネットはとても複雑な内部構造と美しい仕上げになっていて、当時のアメリカの熟練の職人が携わった事が伺える。

Stephens Tru-sonic

12年越しでヘアになった オリジナルのキャビネット

月日の流れは早いもので、この連載が始まったのは14年前の2008年冬だ。記念すべき第1回のテーマは、トゥルーソニックだった。

アトリエJe-teeの岡田さんになぜJBLでもマランツでもなく、このメーカーだったのかを当時たずねたら「問い合わせが多いわりに情報が少ないから」という返事だった。その頃、ヴィンテージにまったく詳しくなかった僕は、ああそんな程度だったが、この十数年間、トゥルーソニックはJe-teeでよく見かけるので、そもそも岡田さんはこのスピーカーを好きなことがわかる。取り扱いは多いらしく「まあ世界一じゃないですか」と軽く胸を張っていたが、そうだと思う。

その第1回でも38cm径同軸ユニット206AXを取り上げた。だが今回のキャビネットは登場しなかった。実はいくら探しても見つからない稀少モデルらしく、なんと「12年越しでやっとヘアになった」とらしい。

写真の通り、キャビネットの中にキャビネットがあるような、凝った構造だ。おそらくかなり高価で生産数も少なかつたのだろうと想像する。所有者も簡単には手放したくないはずだ。

試聴では、ヴィンテージではない新しめのアンプ、オクターブのV70SEをパワーアンプとして使った。その理由は、スピーカーはミッドレンジが充実してい

るので、中域濃厚のヴィンテージも悪くないが、ワイドレンジ志向の現代アンプもマッチングはいいとのこと。

まずはバド・パウエルの「クレオパトラの夢」がかかった。ピアノ、ベース、ドラムの躍動感がたまらない。振動板が薄く、いかにも高エネルギーの音だ。

僕はルディ・ヴァン・ゲルターの録音には信奉しているけれど、もったりしたピアノはいただけないことがある。これはからっと乾いて粒立ちがいい。そしてドラムのブラシもサクサクと軽快だ。

もちろん「ブルー・トレイン」の三管もめちゃヌケがいい。コルトレインもリバー・モーガンもいいのはわかっているのだが、カーティス・フラーのトロンボーンがこれほどオーディオの音としていいと思ったことはない。ここまでふっくらと自然で温かい音色を出すのはなかなか難しいと感じた。

ジョアン・ジルベルト、ウイリー・ネルソン、ダイアナ・クラールとヴォーカルが続く「ロックもいけますよ」とアメリカの「ヴェンチュラ・ハイウェイ」がかかる。これがとどめを刺した。明るく爽やか、それでいて熱気があるウエストコースト・サウンド。

何度も聴いてよく知っている音楽からまた新たな魅力を見ることができるのは、まさにオーディオの醍醐味。この音を家に持ち帰れるもんなら持ち帰りたい。206だけでもいつか欲しいです。